

ミシェル・ド・モンテーニュ『エッセー』における「信と知」

山本佳生

本修士論文は、ミシェル・ド・モンテーニュ『エッセー』において最大の章、「レーモン・スポンの弁護」を精密に読解することで、モンテーニュの信仰態度や、事物の認識と把握について彼がどのように考えていたかを探り、それらを思想史的文脈に置きなおし、また同時代の作家たちとの比較を通じて、モンテーニュの思想の独自性を明らかにしようとしたものである。

序章

『エッセー』を読むのに際し、研究者や批評家は次のようなアプローチを試みてきた。第一には、歴史学的研究によって、モンテーニュが社会とどのように関わったかを具体的に明らかにしながら、文筆家ではなく、判事や政治家としてのモンテーニュの姿を浮かび上がらせた。第二に、『エッセー』のテキストに秩序や計画を読み取ろうと試みた研究もある。難解な文章を読解する助けとなり、『エッセー』の章の連関に意図を見出した。第三に、モンテーニュの思想の源流を探ることで、よりよく『エッセー』の内容を理解することが可能になった。懐疑主義やストア的態度についても多くの研究がなされてきた。本論文においては、『エッセー』第二巻12章「レーモン・スポンの弁護」の読解を行ない、モンテーニュにとっての「信」と「知」、つまり、神への信仰態度と事物の知覚、認識の方法がどのようなものであるのかを明らかにすることを目的とした。言い換えれば、それは『エッセー』のテキストにおいて神学と認識論を考えることである。

第一章では、『エッセー』のなかで最大、最長、内容も神学的、哲学的な色合いの濃い第二巻12章「レーモン・スポンの弁護」の成立過程を追う。

第一章

まず最初に、レーモン・スポンとは一体誰なのか。彼はカタルーニャ出身であり、医学や神学に通じ、1436年にトゥールーズで亡くなっている。彼の『自然神学』は、ヨーロッパ各地で出版され、広まったことが知られている。なぜモンテーニュはスポンの『自然神学』を翻訳、出版し、そのうえスポンを「弁護」する長大な章を書くことになったのか。

モンテーニュ自身の説明によれば、翻訳は父の命令に従ったままであり、みずから進んで行なったわけではない。この『自然神学』は父に進呈されたもので、長らく放置されていたが、父が死ぬ間際になってモンテーニュに翻訳と出版を命じたのだという。この本は、きわめて正統的な神学書であり、ルターの新説が力を持ち始め、宗教の混乱を招いた当時であって、まさに適切なものだった。モンテーニュの説明は非常に慎重であって、自分の翻訳作業に非はないと言いたいかのようである。この慎重さは、政治的な理由によるものだ。1580年出版の『エッセー』が書かれた1570年代にあって、モンテーニュはカトリックとプロテスタントの仲介者としての政治的役目を負っており、神学の話は避ける必要があった。

それゆえ、『エセー』の章では、スポンを弁護するよりも、自分自身の弁護、すなわち、若い頃行なった翻訳の弁明を行なっているのである。

次の第二章では、スポンに寄せられた批判の第一に対するモンテーニュの回答を軸に、スポンとモンテーニュの信仰態度の差異を明確にしていく。

第二章

スポンに対する批判の第一は、信仰を理性によって確立するというスポンの主張が間違いである、という信仰至上主義者たちによるものだ。ところで、スポンの神学は、信仰をより確かにし、神の真理を理解するために、理性もまた必要とされるという、カトリックでは正統的な考えの一つである。

スポンの伝統的な神学思想に対し、モンテーニュ自身の考えはどのようなものか。彼が重視するのは神の恩寵である。信仰とは、人間的手段である理性や思考能力などで神と結びつくことではない。それは、神の側から恩寵として下されるものなのだ。そしてその神を、理性的な推論や論証によって明らかにすることではなく、ただ謙虚に服従することをモンテーニュは選択する。モンテーニュにとっての神は、いかなる人間的な認識も到達できないものである。これは単なる信仰至上主義とは異なり、古代哲学の色合いを濃く帯びたものだ。モンテーニュはスポンに寄せられた批判に対し、正面切って応答していない。だが、同時に、信仰だけを重視するような考え方も、不自然なものとして斥けるのである。

第三章

スポンに対する二つ目の批判は、スポンの議論の論拠が弱すぎる、という理性に重きを置く人々からのものである。これに対しモンテーニュは、この章のほとんどをその論駁に費やしている。モンテーニュの論駁は徹底的であり、かつ根源的である。彼は十六世紀にヨーロッパ各地で盛り上がりを見せた懐疑主義の議論を用いつつ、より強化し、深化させた解釈を行なっている。

セクストゥス・エンペイリコスの『ピュロン主義哲学の概要』が1562年にアンリ・エティエンヌによってラテン語訳され、出版されると、キケロや聖アウグスティヌスの著作と相まって、ルネサンスの知識人に大きく影響を与えたことはよく知られている。

しかしながらモンテーニュはピュロン主義とは異なり、意見を対置するのではない。意見を列挙することで、判断を保留するのでもない。判断を積み重ね、精神の平静を得る代わりに、たえざる探求のなかに精神を置くのだ。「私は何を知っているか Que-sçay-je?」というモンテーニュみずから編み出した懐疑の表現は、こうしたモンテーニュの懐疑の独自性を示している。

第四章

「レーモン・スポンの弁護」の章においてモンテーニュが行なったのは、神の絶対性を強調することと、人間理性の無力さを明らかにすることである。理性的認識に基づく「知」は無効となったが、『エセー』第三卷13章「経験について」において、ふたたび「知」の問題を取り上げる。今度は経験に基づく「知」を考察しようというのだ。

すべての人間は生来、知ることを欲する、というアリストテレス『形而上学』冒頭の言葉に触発されて、モンテーニュは経験上、事物に関する知識が一致したことはいまだかつてなく、多様さと相違こそが事物の普遍的な特質なのだとして、知識を求める人間の欲望は、この世では充足することはなく、そ

の知の探求の終わりはあの世に置かれているのだと結論する。この結論は「レーモン・スボンの弁護」で示されたものと同じである。結局、人間の力——理性であれ、経験であれ——では、「知」には到達できないのだ。モンテーニュは、したがって、事物に関する「知」の探求をあきらめ、今度は自分自身へと目を向ける。

モンテーニュの父親の世代に属するラプレーもまた、アリストテレスの言葉に触発されて、意見を述べている。人間の知識の完全性をこの世で得ることは不可能であるが、福音書の教えに従って、天上の事柄を詮索するのはやめて、神の意志が天においても、地上においても成就するよう祈れ、というものである。この考えは、エラスムスに影響を受けている。また、モンテーニュと同時代のアリストテレス『形而上学』の注解にも、同様に、人間の「知」への欲求がこの世では充足しえないことを示している。

モンテーニュは人間の求める「知」が不確実で、不完全となることを示したが、これは、ルネサンス期に広く共有された意見の一つである。

終章

モンテーニュは、探求の主題を自分自身とする。これはいうまでもなく、「汝自身を知れ」の格言から引き出されたものだ。プラトンの対話篇『アルキピアデス第一』における「汝自身を知れ」は後世に大きな影響を与えたことが知られている。この対話篇で言われているのは、自分自身を知ること、思慮・節度の徳を得ることができるということだ。

古代の解釈において、自己認識は、自分の無知を知ることである。いままで知っていると思っていたことに対して、自分がまったく無知であったと明らかにすることで、謙虚になり、真実の探求へと向かうことができるのである。他方、より世俗的な解釈もある。自分自身を知るとは、政治や軍事において、自分の能力と適性を正確に知ることである。重要なのは、自分の力がどのようなものか知り、政治や軍事の場で活躍することである。いわば、古代において重視されたのは、自分の知識や能力の限界を問うことであった。

こうした古代の考えとはまったく異なって、モンテーニュは、自分自身を知るとは、自分自身を記録することだとする。自分の姿を描写し、その過程で自分に愛情を注ぎ、磨いていくうちに、『エッセー』という自分だけに関する、また自分と同質な「記録」が出来上がるのだ。これがモンテーニュにとっての「汝自身を知れ」という言葉の実践なのである。

古代の文芸、哲学に多くを負いつつも、キリスト教の教えから逸脱することなく、自分なりの考えを発展させていくモンテーニュは、自分についてだけ語るという方法で、新たな「知」を確立した。それは事物についての「知」ではなく、「自己知」である。また、同時に、神について余計な議論をしないという一貫した態度によって、「信」、つまり信仰も控えめな仕方で保持されている。

このようにして、二つは結びつき、「信と知」は『エッセー』の特色の一つとなる。古代の知恵とキリスト教の教えを両立させ、混合するだけにとどまらず、新たに自分なりの解釈を付け加えるという自由さがモンテーニュの『エッセー』にはあるのだ。